

アヴィセンナに於ける評価力の問題(梗概)

牛 田 徳 子

評価力^注はアラビアの哲学者アヴィセンナ（980～1036）によって始めて規定され、後中世のスコラ哲学に受継がれた一つの内的感覚の概念である。本論はこの能力の認知的役割の分析を主として行なうことによって評価力の概念を明らかにしようと試みるものであつて、この概念の歴史的検討は行なわれない。尚本論では Šifa'（中世で Sufficientia と称されたもの）に含まれる靈魂論（Avicenna's De Anima, edited by F. Rahman 1960）と Najāt に含まれるそれ（Avicenna's Psychology, translated by Rahman 1952）が参照された。

アヴィセンナによれば内的感覚力は共通感覚、表象力、想像力、評価力、記憶力に分たれ、これらは外的感覚と同様人間動物に共通である。人間においてはその上に理性能力が加わり、実践理性と理論理性に分たれるが、それは人間に属する限り可能理性であり、これを超越して、これを現実態ならしめる能動理性が存在する。

アヴィセンナは評価力の認識を説明するためにまず内感の対象を二つに分析する。つまり彼によればその一つは事物の感覚的形相でそれは外感がまず受取り内感へ伝えるもの、もう一つは事物の「意味」であつてそれは内感が独自で受取るものである。共通感覚、表象力、想像力の対象は前者であり、評価力、記憶力の対象は前者と関聯しつつ後者が含まれる。評価力の把握するこの「意味」とは個別的、具体的状況における対象の非感覚的性質であつて理性の普遍的一般的な事物の非感覚的徴表即ち概念と區別される。この対象の意味的認識は動物の一種の判断作用の中に如実に見出される。例えば羊があゝの狼を避け、この子供に近附くのは狼や子供における敵性親愛性という非感覚的性質を認識するからであり、黄色い液体（蜜）をなめるのはその中に甘さを認識するからである。この認識作用には二つの機能が見出される。即ち敵性、親愛性、甘さ等という要素的把握とそれらを述語として基体的主語に結合する判断作用である。類似の構成作用は想像力にも見出される。しかし想像力は単に複数の表象を結合するだけであつてそこに實在の断言がないとアヴィセンナはいう。つまり評価力は個別的主語対象について或性質の實在的関聯を述語付ける判断力であつて、それ故「甘さ」は単に甘

いという感覚的表象を超えて、主語に述語され得る意味的志向的性格を獲得している。

トマスは評価力 *vis aestimativa* を動物の、本能に基く評価的認識に限定しているが、アヴィセンナはそういう規定をしていない。彼にとっては評価力判断の真偽の効率が問題であり、それ故人間は直接的発想によるこの種の判断を軽視するが、他方動物はそれしか持たず大部分の行動をそれに負っている、としている。そのみならず評価力は人間において理性と連帯する時理性に奉仕する最高の内的感覚力となる。それは彼の抽象理論において明らかである。抽象は対象の形相をその質料的基体から引き出して主観が受取ることに於て成立するが、アヴィセンナは抽象の段階を外感、想像力、評価力、理性の四つに分類する。外感是对象の形相をその質料的偶然徴表と共に受取るがその際質料的基体の現在が不可欠である。想像力の抽象はそれに反して質料の不在に於て成立する。評価力は前二者と異って、本来非質料的であるが偶有的に質料の中にある対象の形相を受取る。最後に理性は如何なる質料的原理の規制も受けない知的形相を受取る。アヴィセンナによれば知的形相は質料的存在者の知的形相であるか、偶有的に質料的となった知的形相であるか、そのどれでもない純粋な離存的知的形相であるかである。最後のものは抽象を経る必要がなく能動理性より一挙に受取られる。さて残る二種の知的形相の抽象には前に述べた内的感覚の段階にそれぞれ相応し得ることが発見される。即ち質料的存在者の知的形相は想像力の内容よりの抽象であり、偶有的に質料的となった知的形相は評価力の内容よりの抽象である。従って評価力認識は想像力認識より、より高次の知的認識に奉仕している。換言すればより知的な適性 *dispositio* を具えているというべきであろう。以上の意味ではアヴィセンナの評価力は丁度トマスの考えた *vis cogitativa* (トマスはこれを同時に *intellectus passivus, ratio particularis* と呼んでいる) と一致するといえよう。評価力是对象の非質料的形相を常に時間空間の個別的状況に於て把握する故に理性の経験的認識の基礎となる個別的記述を提供するものである。故に単に生命保存の欲求に基く主観的認識に留らず、理性の働きと共存する限りは客観的認識の一つの能力といえることができる。

注 アラビア語では *wahm*。この単語は想像、推測、思い込み、誤断等という意味であって、評価の意味は全然含んでいない。中世ラテン語に翻訳されて *aestimatio* となった。